

とが知れ渡っていたのであろうか、多くの人たちから親切にしていた。お二人がいなかったら私はどうなっていたか分らないと思う。栄養失調の体も数カ月で回復し、注文していた服は仮縫いのときもでき上がった時も窮屈になるほどだった。

シベリア抑留記

愛知県 太田 吉 春

一、出生から入隊

大正十一（一九二二）年一月二十日 岐阜県岐

阜市加納本町に生まれる

昭和十二（一九三七）年九月 国鉄に入社と同時に名古屋電気学校夜間部に入學

昭和十五年九月 名古屋電気学校夜間部卒業

昭和十七年 徴兵検査で第一乙、甲種編入

二、ソ連軍侵攻前

昭和十八年二月一日

鹿島電信五連隊を経て、軍服を着用して北支那方面軍電信一〇連隊に現地入隊（済南の白馬山）

昭和十九年

天津にて自動車工手の修業を済ませてすぐ、新郷の独立歩兵四旅団に転属（兵器勤務隊）

旅団司令部の電話交換所長として勤む

このころ、あるときアメリカのP51戦闘機の爆撃を受け、下士官一人、兵六人戦死

三、ソ連軍侵攻

昭和二十年八月

満州の洮南へ転属し、しばらくして新設第一三八師団要員として吉林の指導大学へ転属命令を受け、まず吉林の市公司へ着きました。そこで目にした公報板で「ソ連軍が洮南進駐」の報を知る。それは私が洮南を出て七時間後のことでした。

四、終戦

昭和二十年八月十五日、その後天安幼稚園で混乱の中、待機中、終戦の報を聞き、ソ連の兵隊が民家に入り略奪行動を起こしていた。近くに住んでいるのは日本人ばかりでした。ソ連兵を二人で殺して防空壕に埋めた。

五、シベリア抑留地への旅

武装解除の指示を受け、当地の競馬場へ納めた。そして部隊は解散はなく、そのまま待機の指示あり。その後幾日過ぎたか、シベリアへ静かに行ってもらいたい、さもないと内地の日本人はどうなるか分からないと言われ、皆は指示に従った。混乱の中、貨車に乗るため数百メートルの道路を、戦鬪で死んだ一般市民の死体がふさいでいた。その死体をまたぎ、よけて駅まで歩いた。

貨車に乗せられ黒河へと向かった。駅で停車するたび行き交う列車もすし詰めだった。それは日本への引揚者だった。中には、赤ん坊が押しつぶ

され死んだので列車から捨ててきたと泣いて話す人もいた。

やがて黒河に着き一泊、幕舎で過ごしました。

その夜、皆さんが持ち物を略奪されました。それをソ連兵が見つけて発砲しました。翌日貨車に乗せられブラゴエシチェンスクに渡り、シベリア鉄道の長旅に入っていくこととなる。十月初めころ。日が落ちると列車は走り出し、明るくなると停車した。そうして三十日目にサマルカンドに着し貨車を降り、夜間凍りついた雪道を一晩歩かされた。当地はこのころの気候はマイナス二〇度くらいなので、十分くらいの休憩中に動けなくなり、収容所へ着いたら六人足りないでソ連兵が馬で捜しに行き、六人を馬ソリに積んで帰ってきました。凍死でした。

着いた所は夜中でしたのでよく見えなかったが、黒っぽくくすぶった大きな物置庫のような所でした。

六、抑留地の生活

抑留地は、初めの二年はサマルカンドで、あと二年はカラカンドで、全部で四年の年月でした。

他の抑留者は五百人くらい。居留民と言っていい。中国人と韓国人がいた。気温が低いせいか、シラミは見た覚えがなかった。衣服の消毒など一度もなかったようです。入浴は、住民の入る浴場です。一般の人が終わってから。時間が定められており、その時間に入ったのですが、一般の人と同じように湯を使ったかは分かりません。私たちは初めの一分間くらいシャワーが出るのでその間にシャボンをつける、その後二分間くらいシャワーを浴び、体全体を流して終わりでした。ただこれだけです。収容人員は私ら日本人は千人くらい、居留民と言われる人が五百人くらいで、全部で千五百人と聞いていた。

七、労役

初めは鉄橋下の除雪を何か所かした。その後は道路工事。大きな木造家屋や四階建てのビルのレンガ積みもやってきました。またあるときは貨物駅に行き材木降ろしをしました。そのとき、私は友人と二人で降ろした木材を貨車の下で整理をしていました。終業時間が迫ってきたのでソ連兵が「ダワイ、ビストラ」と叫び、足で材木をけり落としたため、私も友人も材木が後頭部に当たり失神して、二時間後に気がついて助かったことがありました。そこは病院でした。皆さんが見舞いに来てくれました。

労働の時間は、ソ連兵の指示により時間まで行っただけだった。作業中にじゃがいもを畑へ盗みに入って見つかり、一人射殺されたこともありました。ここまではサマルカンドでの作業でした。

これからはカラカンドへ移ってからの二年間の作業について述べます。

カラカンドの二二収容所は広い収容所で、北側

は石山が連なっていました。南方は街まで一・五キロメートルくらい離れた所で、広い敷地内に平屋の学校の校舎のような建物で、四棟と炊事場と

食堂があり、周囲は有刺鉄線が張られ三重の垣根になっていて、中に警戒灯用の電柱が建って電球がついていました。こんな収容所に着いた早々のことです。後藤副官（日本人の代表）より依頼を受けて私はこの収容所のマンチャール（電気技術者）として、一人で毎日夜間、千五百人に必要な水を供給するため、一キロメートル離れた現地人の使用している給水所に勤務をすることになりました。一人きりで夕方収容所を出て給水所に行き、現地人使用のバルブを閉めて収容所側のバルブを開けます。現地の人が一人勤務していませんから、その人と一緒に仕事をしました。大きなモーターでコンプレッサーを動かして九十メートル地下の水を上汲み上げて大きな四角いタンクに入れ、そのタンクより送水ポンプを経て利用者側へパイプで送られるので、私は送水ポンプの開閉器

を動作させてから収容所に戻り、給水されているかを確認してまた給水所に戻り、一晚現地の人と一緒に勤務しました。

一年くらいしてこの給水所はやめ、当市の「マイドック」と言う部落の給水所へ変わりました。ここでは汲み上げ作用はなく、他所より現地人用に造られた給水所で、その隣に収容所へ送水できるように設備ができていたのでびっくりしました。今度はここで勤務となります。夕方行ってスイッチを入れ、朝になったらスイッチを切り、送水ポンプの異状を確認して帰りました。ここで勤務時間中は、夕方より朝まで電気のヒューズが切れなければ何もすることは無いのです。だから、一般の現地の人が毎日天びん棒の前後にバケツを下げ、タロンを窓口のおばさんに出して水を運んで行くのを、給水所の小屋の横で立って見ているのが毎日の私の仕事でした。そして朝明るくなって労働者が出勤したころ、私は一人で収容所へ戻り朝食をして寝るのです。

収容所の門を入ると冬は毎日そり馬車が止まっ
ていて、そこに四人か五人くらいの死体が積んで
ありました。それは病気で死んだ抑留者を収容所
の裏山へ埋めに行くのだと聞きました。後に聞い
た話ですが、三百五十人くらいとのことでした。

こんな仕事をしていれば、他の皆さんはうらや
んで見ていたと思います。直接聞いたのでは、ソ
連は電気屋さんがいないから私たちが帰った後も
太田君は日本へ帰れぬだろうと言っていました。

そうこうしているうち、ある日夜中に隣のドイ
ツ人のペンネル・リザーさんが、こっちへ来なさ
いと呼びに来たので隣に行きました。「ザクロイ
チェドエリー」と言うのでドアにカギをかけ中
入ると、狭いところにペーチカが赤々と目に入り
ました。毎日私はマイナス一五度から二〇度くら
いのところでストーブなしですからウワーと思い
ました。どうしてこんなことかと思ひながら翌朝
初めて暖かい一夜を過ごして収容所へ戻ったら
「日本への帰国」を知らされ、ああ現地の人は私

たちより一足早く知っていたんだと分かりまし
た。

そして最近のニュースで、ソ連（ロシア）と
チェチェンが戦闘していると聞き、給水所を思い
出しました。それは、給水所へ毎日現地の人が来
ますが、並んで順番待ちのとき、しょっちゅう
チェチェンスキーが来ると悪口を言っていました。
ドラーコ、サバークと、犬だ、けもの扱いの
話を聞いていました。チェチェンスキーはロシア
では相当卑下された恨みが今おもてに出たのかも
しれんと感じています。そしてこんな仕事のおか
げで、現地には世界中の人がカラカンダに住んで
いることもこの目で見る事ができました。イギ
リス人、トルコ人、中国人、朝鮮人の人たちと会
うこともできました。

またこんなこともありました。あるときに寝て
いるところを起こされ、警戒灯の電球が切れてい
るので交換せよとの命を受けて電柱に昇ったとた
ん、パンパンと二発発砲されて、すぐ電柱を滑り

降りて助かったことがありました。これはソ連兵同士の連絡がなかったからと後で聞きました。その他、吹雪で電線が切れたときも、電氣の流れている線を柱上でつなぎ、ソ連の将校さんがびっくりしていました。

八、抑留者の統制管理

四年間のうちで一回だけ、お尻をつねって、アジーン、ドヴァー、ツリーと三つに分けられたことを覚えていません。それ以外のことは知りません。特に健康管理についてはなかったように思います。点呼や作業場への往復の監視は、ソ連の兵隊がついて行っているので問題はありませんでした。衣服については年じゅう綿入れの上下服でした。食事は一日三回の覚えです。黒パン一切れと、肉じゃがのスープ一杯だった。休日はありません。ベッドは二段ベッドで、建屋は平屋の日本の小学校のような建物でした。

民主化教育は一度もありませんでした。でも、

はつきりとは言えません。なぜなら、私は二年間、夜間、一人で収容所外の勤務でしたから。

九、抑留中の生活と極限状態における意識

終戦前、北支那で何度も死に直面したので、どんな状況にあっても気持ちがお不思議と動じないようになつていった。電氣技術者はおそらく日本へ帰れんやろうと皆さんが言っていたので、帰国については半分はあきらめていました。

私の場合、四年間の抑留生活のうち後の二年というものは一般の現地人と余り変わりない生活でしたので、苛酷さは感じませんでした、一人で収容所を出て朝になって帰るといふ生活でしたから。

十、帰還

昭和二十四年九月ころ収容所で「帰国」を告げられ、すぐに貨車に乗せられ、十七日間かけてナホトカまで真つすぐに帰ってきました。そして帰

還船は栄豊丸だったと思いますが、はっきりしません。舞鶴港への上陸は十月一日ころです。手続を終え故郷の岐阜へと列車に乗り、すぐ上の姉が、どうして知ったか京都駅まで迎えに来てくれました。そして一緒に岐阜駅に着きました。岐阜駅のホームまで町内の人が迎えに来て下さいました。そして、声を出さない万歳三唱を受けました。後で聞きましたら、声を出さない万歳をするように通知されていたそうです。

十一、帰国後の生活

私は国鉄職員だったので、帰国の翌日出勤せよとの命に従い、すぐ勤務につくことができました。

家へ帰って見れば戦前の借家はなく、焼けたタン屋根の物置小屋があり、そこで暮らすことになりました。

姉二人は嫁いでいましたので、妹と弟と母と私の四人暮らしになります。まず家を建てなければ

と色々と助けていただき、中二階の家を建てることが一年後にできました。そして嫁をもらいました。生活は順調で、昭和五十二年四月一日付で定年退職し、借地だったので借地を買い取り、家を売って、昭和五十八年四月、春日井市に移住し現在に至っております。

我が激動の青春記

三重県 木村 謙 二

すべてはここから始まった。そして、これがンベリア抑留へと運命づけられたのである。

それは昭和十九（一九四四）年七月、私十九歳の夏に一通の封書が届いた。陸軍特別幹部候補生合格、来る八月十五日、中部一二九部隊（静岡県磐田）に即入隊せよとのことであった。

このころ、戦争は総力戦に突入し、大本営発表の戦果に一喜一憂した。学徒動員、女子挺身隊も